

本当の教えに出遇うことは「生きる」ことから、「生かされる」ことへの大転換

無碍の一道 第69号

発行 2019年9月7日
発行者:淨土真宗本願寺派 長尾山 天龍寺
副住職 天野英昭
〒739-0147 東広島市八本松西6丁目10番1号
TEL・fax(082)428-1360

秋彼岸法座

日 時 9月26日（木） 9：00～15：00頃

朝席 9:00～11:30 暮席 13:00～15:00

ご講師 長岡 正信 師（呉市 西岸寺ご住職）

第95回歎異抄輪読会

日 時 9月20日（金） 14：00～15：30頃

ご講師 松田正典先生（広島大学名誉教授）

費 用 500円

参加者 天龍寺の門信徒の方のみならず、どなたでも参加は自由です。

仏壮大からのお知らせ

★天龍寺佛教壮大年会 月例会 9月30日（月）19：00～20：30

磯松天龍寺墓苑並びに磯松天龍寺墓苑合同墓合同参拝のお礼

今年も8月12日（月）の18:00から磯松天龍寺墓苑にて合同参拝をさせていただきました。また、大変暑い中、お忙しい中、今年も昨年同様、多くの方のご参拝をいただきましたこと感謝申し上げます。さらに過分なるお供えも頂戴しました事、重ねて感謝申し上げます。

今年も家内の兄（島根県高林坊住職）・息子と私で法要を務めさせていただきました。その際にも申しましたが、約30年以上の前の話になりますが、磯松天龍寺墓苑での初めての盆法要の折には、祖父・父、私、とご参詣していただいた4～5人の方とのご縁がありました。

その事をふまえ思いますに、この度の法要を祖父が生きていましたらどのような思いになるのかとも考えたことがあります。

ただただ、ありがたいご縁をいただいており、今後息子・孫の代へと変わっていくと思いますが、これまで同様に、磯松天龍寺墓苑・磯松天龍寺墓苑合同墓参拝を継承させていただければありがたいと思う事でもあります。

遠くは東京・千葉・鹿児島県等、なかなかご縁をいただく事が難しい方々ともこの様な法要を通してご縁をいただきます事は、この点もありますとしみじみ感じる事あります。

健康・家族・財産等が拠り所、その価値観が通用しない世界を経て・・

近頃つくづく思います事に、いくら科学技術・医療技術が発達し、人生50年、60年と言われる時代から、人生80年、90年、100年と言われる時代に入り、健康寿命が伸びたといえども、高飛車ながら有史以来、人間が経験してきた老いる事等は、人間の英知を極めた所で克服することが出来ないと還暦を過ぎ自分なりに実感することです。

一方で、自分の意思でこの境涯に生まれたわけでもなく、さらに親・家等を選んでこの境涯に生まれる事も出来ない存在であり、道端に咲くタンポポの花の如く、種が風に吹かれ飛んで行き、その落ちた所で芽を出し、花を咲かせ、枯れて散っていく過程をふまえ思いますに、私自身も自然界の営みの中での人生をおくらさせて頂いているのだとも感じる事があります。

道端に咲くタンポポの花の如く、その日その日のご縁の中で自分なりの輝きを放ちながらの人生を歩んでいければとも思う事であります。

さらにお話は展開しますが、花にも色々な花があり、それぞれに輝きがあるように、人も勉強の得意な人、スポーツが得意な人等と様々であり、人にも花と同様に様々な輝きがあると思っております。

しかしながら、その人、その人に応じた環境が与えられ、その与えられたご縁の中で、日々不平・不満・愚痴等を言い、時に挫折、失望感など味わいながら、決して自分の意図しない・願わないご縁の中で、野に咲くタンポポの花の如く、その時、その時なりの輝きを放ちながらの人生を歩むことが大切な事とも考える事があります。

さらに私たちは比較の世界の中で生きている存在であり、私の様に40代、50代の自分と比較し、「体力がなくなった。あそこが悪くなった等」と嘆く日々をおくり、一方で人と比較し、比較されながら生きていかなくてはならない存在であると考える事があります。重ねて申しますが、自分にしか放てない輝きを放ちながらの生き方で良いとこの点も還暦を過ぎ思う事があります。

最後になりますが、お気を悪くされましたらご理解・ご容赦をいただければありがたいと存じますが、教員を退職させていただき、早いもので10年が過ぎました。この10年間の中で、多くの悲しいご縁、すなわちお葬儀のご縁を頂いたことがあります。

その悲しいご縁を通して、それぞれの故人様のご逝去に関する事をたくさんご教授いただきました。哀しいかな多くの方々は、この娑婆の縁を去る瞬間まで、自分の意図しない・願わないご縁に遭いながら、この境涯を去っていかなくてはならないのだとご指南いただいたことがあります。

さらに、日頃私たちが拠り所にしております健康・家族・財産等といった価値観がまったく通用しない世界を経て、多くの方々がこの境涯を去れていかれたこともご教授頂いたことがあります。

お正信偈に「畢竟依を帰命せよ。」ひつきょうえという言葉があります。ある意味、究極的な拠り所と申しますが、この厳しい現実の人生を生き抜き、娑婆を去っていく上で、本当の意味での拠り所の必要性をお教えいただいたことがあります。

お釈迦様は、この境涯は「苦しみ」とご説法されました。それはこの境涯は自分の思い通りにならない故に、苦しみとご指南されたことであります。おぎゃーと生まれた瞬間から、臨終の間際まで自分の思い通りにならない人生を、何とか少しでも自分の思い通りにしようと日々悪戦苦闘しながら、生きていがざるおえない存在であると考える事でもあります。

年代。環境によって色合い、大きさ、形は様々だと思いますが、日々与えられたご縁の中で、その時なりの輝きを放ちながらの人生を歩めればとも思っております。